何とかして立て直せるように努力しないといかんとおもっていたが、退職の道を選んだ

阿部（株）がいよいよ危ないというときに、まず救済に名乗りを挙げたのが今治織物工業協同組合であったが、組合の代表者と取引があった銀行が広島銀行であったため、折り合いが付かず断念した。そこに、1957年以来阿部（株）の監査を務めてきた伊予銀行から、残務処理を旭染織㈱社長の八木友一氏に依頼してはどうかとの打診があった。同行は、旭染織㈱とも取引していたため、両社の台所事情を知る立場にいた。結局、伊予銀行の要請を受けて、八木氏に入ってもらい、中谷稔氏と伊予銀行の担当者の３人で、阿部（株）の財務およびその他の清算業務に入った。それでも43億円の債務と、会社の土地建物などの資産処分が残り、これらを八木氏の仲介で今治造船（株）傘下の今治産業㈱に買い取ってもらった。

中谷氏は、阿部（株）の最後に立ち会い、タオル部門をトウヨテリー（株）に譲渡する際の事務的手続きにも係わった。トウヨテリー（株）は、阿部（株）のタオル部門を引き継ぐために旭染織㈱によって1980年に設立された会社である。この新しい会社に、阿部（株）のタオル部門にいた80名の従業員と三芳工場のタオル工場1，500坪（残りの織物工場は旭染織㈱が継承）を合わせて1億5,000万円で引き渡し、阿部（株）が築いてきた取引上のネットワークもそのまま譲渡された。

トウヨテリー（株）にタオル部門が譲渡された直後、バブル経済が到来し、タオルがどんどん売れるようになった。会社の売上は上昇しつづけ1995年には年商35億円を記録した。トウヨテリー（株）が窓口となってタオルの注文を受け、旭染織㈱がフル稼働でタオル生産にあたり、急増する需要を満たした。

トウヨテリー（株）の親会社である旭染織㈱は、1959年に八木友一氏が設立したタオルメーカーで、染晒工程と製織工程の一貫体制を整え、成長した企業である。八木氏は、今治タオル業界でも歴史

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

表1　阿部株式会社の変遷

年次	内容
1890	阿部平助が紀州綿ネルの生産を開始
1894	阿部平助がタオルを試織
1896	阿部平助・光之助によって阿部合名会社設立 タオル織機30台を増設し約8千ダースを生産
1900	イギリスから50台の力織機を移植し伊予綿ネル生産に集中
1913	阿部株式会社へ改組
1916	タオル生産を中止し綿ネル・広幅綿織物に特化
戦中	軍服などを生産
1946	捺染機の導入・染色機の拡充により輸出向（おもに東南アジア）広幅綿織物の生産を拡大
1950年代半ば～1960年代前半	力織機から自動織機へ転換
1960	綿織物用織機をタオル用に改造してタオル生産を再開しプリントタオル生産を開始
1972	今治市内の工場を東予市に移転（三芳工場）
1980	旭染織㈱社長の八木友一氏の仲介により和議申請 トウヨテリー（株）設立 阿部（株）のタオル部門をトウヨテリー（株）に譲渡
1982	阿部（株）の全株式を2割の価格で回収 今治造船（株）傘下の今治産業㈱に43億円の債務と土地建物の資産を譲渡
2000	トウヨテリー（株）設立20周年記念で中国に慰安旅行
2009	トウヨテリー（株）の親会社である旭染織㈱倒産により解散

のある楠橋紋織㈱の大番頭として手腕を振るってきた人であった。同社は、1992 年に今治タオル業界では初となる中国への進出を果たし、大連に大連旭染織有限公司（合弁）を設立した。24 時間操業可能な大量生産体制を敷き、日本をはじめアメリカ、香港、シンガポールなど幅広くタオルを販売した。しかし、主力取引先の不良債権問題、事業拡大による投資負担などにより、2008 年に大連旭染織有限公司での操業を停止、ついで 2009 年に会社本体も倒産した。

1990 年代以降になると、中国製タオル輸入が増加して今治タオルの売行きを直撃したことは以前にも述べたとおりであるが、事業拡大路線を歩んできたトウヨテリー（株）と旭染織㈱は、この影響により経営が急速に悪化していった。中谷氏は、阿部（株）を継承した

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

会社の危機を目の前にして、「何とかして立て直せるように努力しないといかん、これから先々何とかやっていかないといかん」とおもっていたが、経営方針の違いを理由に、トウヨテリー(株)から退職を勧められた。そして、2004年、中谷氏は苦渋の決断ではあったが、同社を退職する道を選んだ。その際、阿部(株)時代の関係資料および想い出はすべてトウヨテリー(株)に置いてきた。そして、トウヨテリー(株)も2009年の倒産時に資料をすべて処分してしまったため、残念ながらいまでは阿部(株)の詳細について知ることはできない。

こうして、中谷氏は、人生の多くを捧げてきたタオル業界にきっぱりと別れを告げ、2003年の受洗を機に、いまではゆったりと自分のペースで日々を過ごしている。

5. 座右の銘～讃美歌・聖句～

中谷氏がキリスト教を身近に感じるようになったのは、ここ10年ほどのことである。それ以前は、1963年に結婚式を大阪の南大阪教会で挙げたくらいで、長い間キリスト教とは疎遠だった。そして、現役を引退する前年の2003年、曽祖父の中谷卯三郎が創設に尽力した今治教会で受洗し、キリスト教徒となった。ここでは、中谷氏が心の支えとしている「讃美歌」と「聖句」を紹介しよう。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

讃美歌 320

主よ、みもとに近づかん
登る道は　十字架に
ありとも　など　悲しむべき
主よ、みもとに　近づかん

さすらう間に　日は暮れ
石の上の　仮寝の
夢にもなお　天を望み
主よ、みもとに　近づかん

主の使いは　み空に
通う梯の　上より
招きぬれば　いざ登りて
主よ、みもとに　近づかん

目覚めて後枕の
石を立てて　恵みを
いよよ切に　称えつつぞ
主よ、みもとに　近づかん

うつし世をば　離れて
天駆ける日　来たら
いよよ近く　みもとに行き
主の御顔を　仰ぎ見ん

聖句　フィリピの信徒への手紙 4～6

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

中谷氏の幼少の頃の夢は、医者になることであった。中学校になると、建築の仕事をしたいとおもうようになった。大人になって、中谷氏は一家を支えてくれた阿部家への恩返しに、タオル業界に入り、阿部(株)のために懸命に働いた。そしていま、長男の智(さとる)氏は順天堂大学病院眼科医の准教授として活躍され、次男の勇(いさむ)氏は一級建築士の資格をもって大阪の箕面市で「けんちくの種」という建築事務所を経営している。中谷氏は、「自分が若いときはとにかく生きるのに必死だったし、人に助けられた恩は忘れられなかった」から、

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

漠然と抱いていた夢はまさに夢に終わってしまった。でも、その夢をいま息子たちが叶えてくれている。中谷氏は、みずからの人生を振り返り、穏やかな表情で静かにこう語った。「人生ってこういうものかなぁ、不思議なものだなぁ。」（完）

（文責・インタビュー： 辻智佐子）

参考文献

愛媛県生涯学習センター「データベース『えひめの記憶』」愛媛県生涯学習センターHP（http://www.ilove.manabi-ehime.jp/）。

愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念通史編集委員会編［1999］『愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念通史』愛媛県立今治北高等学校創立百周年記念事業期成会。

今治基督教会編[2004]「今治基督教會沿革小史」『今治教会史録』日本キリスト教団今治教会。

柴田弘捷［2012］「今治タオル産業の『再生』と中国」「専修大学社会科学研究所月報」No. 585、専修大学社会科学研究所、2012年2月20日、7-22頁。

編集後記

中谷稔さんがキリスト教徒であり、阿部平助が設立した阿部（株）の最後の重鎮だったことを聞いて、わたしの研究との絡みからも、お会いするずっと以前から至極興味関心をそそられました。とくに、明治期の今治においては、タオルを含む綿織物業とキリスト教は切っても切れない関係にあり、今治の近代産業の発展を理解することは今治のキリスト教の歴史を知ることでもあるからです。

もちろん、キリスト教徒でないわたしが、キリスト教のいろはを語るなど甚だおこがましく無理な話だが、中谷さんのお話をとおして中谷さんと一緒に時代を遡り、これだけはわかりました。キリスト教徒である中谷さんが献身的にも阿部（株）のために人生のほとんどを捧げてきた、という事実です。そんな中谷さんから醸し出るオーラは、穏やかで、しなやかで、強かったで

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

す。花にたとえれば、薄いピンクのユリの花です。インタビューでは、終始、聖母ならぬ聖人の風格を漂わせておられました。（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の七人目は、今治タオルの発展に大きな役割を果たしてきた愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）において、長年、技師・デザイナーとして活躍された高橋俊明氏である。染織試験場が今治のタオル工業の成長に不可欠な存在となり得た理由を、現役時代の高橋氏の活動や人物から探っていく。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.